

スペイン艦隊のイギリス遠征

—パルマ公は何をためらったのか？—

岩 根 圀 和

1.

サンタ・クルス侯アルバロ・デ・バサンが大艦隊のイギリス派遣計画を初めてフェリペ2世へ進言したのは1583年8月であった。短期間ながらもメアリー・チューダーの配偶者であったフェリペ2世にとってエリザベス女王は義理の妹にあたる。出来ることなら戦火を交えたくない。武力攻撃は控えて和平交渉で解決したいのが本心であったが、イギリスの出方によってはいずれ本土攻撃を決断しなければならない時期が来るのではないかと密かに恐れていた¹⁾。新大陸からの財宝船を狙うイギリス海賊は、まるで巨像にまわりつくネズミのように小うるさい問題であるが、まだフェリペ2世の忍耐の限界内にあった。いまひとつの問題であるネーデルラントの反乱も1583年の時点では、エリザベスが公然と支援しているわけでもなかった。したがってアゾレス諸島でイギリス艦隊を撃破した勢いに乗ってイングランドへ艦隊を派遣すべきだとするこの時のサンタ・クルス侯の進言は、フェリペ2世にイギリス攻撃を決断させるに至るだけの説得力を持たなかったのである。しかしその後、両国の関係は急速に悪化の一途をたどることになる。まずドレイクを初めとする海賊船の横行が激しさを増してくる。スペインの船に限って掠奪をしてよろしいとエリザベスから許可を貰っている私掠船が、スペイン・ガリシアの港を占拠したり、カリブ海へと掠奪に出かけてはその成

果を堂々と誇るようになる。その収益の一部がエリザベスの懐へ入るようになっては、もはやネズミどころか巨像に襲いかかるライオンの群れと言わねばならない。下手をすると巨像を倒しかねない状況である。さらに悪いことに 1585 年 8 月、エリザベスはノンサッチ協約のもとにオランダの反乱軍を保護下に置き、歩兵 5,000 と騎兵 1,000 を派遣する強行策に出たのである。しかも 12 月には女王の寵臣でイングランド随一の人気者であるレスター伯を指揮官として派遣するに至っては、フェリペ 2 世の神経を逆撫でせずにおかなかった。

何事にも慎重すぎるぐらいに慎重なフェリペ 2 世が、30 年来の懸案を決断すべくやっと重い腰をあげたのはこの時だった。1586 年 1 月にイギリス遠征艦隊の具体的な編成案の作成がサンタ・クルス侯へ下達され、2 ヶ月を要して 3 月 21 日にそれが完成している²⁾。これによると大型の戦闘艦であるガレオン船が 150 艘、輸送船とも言うべきウルカが 40 艘そして補助艦となる 20 トンから 80 トン級の小型船が 320 艘、合計 510 艘の壮大な陣容である。これだけの船を動かすには水夫 39,000 が必要である。運搬する戦闘員は概算で 55,000 名。総員ほぼ 10 万を養うだけの食料と飲料水を 8 ヶ月分調達しなければならない。艦船に搭載する大砲の種類と数はここに記載するには複雑すぎるが、槍矛を初めとする様々な武器類、そして一丁が 25 レアルの火縄銃を 16,000 丁、30 レアルするマスカット銃が 5,600 丁、それに要する火薬と鉛弾。作戦通りイングランドに上陸すれば大砲を陸揚げして砲架を牽引し、砲弾や火薬を運ぶ荷車にラバが 140 頭、それを御する若者 700 も不可欠である。宿営用のテントからその備品、柱、ロープの数、杭や釘、鋤、鍬、ツルハシ、スコップなどの工具類、兵員の靴や衣服、水筒はもとより獣脂、ローソク、秤、漏斗の数から革紐の量に至るまで、実に微にいり細にわたってその数量と経費が記載されているのには驚かされる。総額で約

14億2,500万マラベディ³⁾。これを見てフェリペ2世が眉をひそめたのも無理はない。新大陸から運ばれる金銀の3年分を越える額である。しかしドレイクの手紙とネーデルラントでのイギリスの暴挙をこのまま放置しておけば、間違いなくそれ以上の出費と被害を被ることになる。そこまでスペインは追い込まれていた。逆に言えばエリザベス女王のイギリスは、望まぬながらもいつの間にかフェリペ2世のスペインをそこまで追いつめてしまっていたのである。

検討の結果、サンタ・クルス侯の原案に従って遠征艦隊の準備が着々と進められることになった。武器、弾薬、船舶はもとよりあらゆる備品、装備、戦闘員がナポリ、シシリー、ポルトガル、フランドル、北海諸国などから掻き集めるようにして調達・召集され、大砲などは敵国イギリスからも購入する離れ業もやってのけたのである。名だたる海将であるサンタ・クルス侯を総司令官に戴くことには誰からの異議もない。これだけの^{もうどう}艦隊を擁する大艦隊であれば、イギリスが総力を結集して対抗してきても鎧袖一触に蹴散らすことができると信じて疑わないフェリペ2世は、1587年の末からしきりと出撃を促す書簡をエスコリアル宮の執務室から送ってくる。この年にメアリ・スチュアートの処刑やドレイクのカディス襲撃があってフェリペ2世が報復攻撃を急いだのは事実である。しかし冬の海に大艦隊を浮かべるのがきわめて危険な暴挙であることは船乗りの常識であった。春になればイギリス海峡に南西の風が吹いて遠征には追い風となるので4,5日で楽々とイギリスへ到達できる。冬にはこれが北東に移って逆風となる。海を知り尽くしているサンタ・クルス侯の腹づもりでは春の出撃しかないのである。しかるにフェリペ2世は常識を無視して出撃を促してくる。言を左右して出撃の引きのばし策をとるサンタ・クルス侯は、古強者の海将ではあっても管理能力に劣る。そのせいもあってか、リスボンの艦隊編成は頓挫を来して混乱ば

かりが蔓延していたのが現実であった。そんな矢先、サンタ・クルス侯の重病報告を追いかけるようにして2月9日、その訃報がマドリッドへ届いた。フェリペ2世からの出撃督促と艦隊準備の遅延との軋轢に挟まれて悶死したのだと噂が流れたが、実際には当時リスボンで猖獗をきわめていた発疹チフスに罹患したのが原因であつたらしい⁴⁾。

第7代メディナ・シドニア公爵ドン・アロンソ・ペレス・デ・グスマンが後任の艦隊総司令官を拝命する交代劇については別の稿で触れたので割愛するとして、公爵がサンタ・クルス侯よりはるかに管理能力に優れていたのが幸いしたのか、危惧された混乱はほとんど起きなかった。むしろ以前の混乱が收拾されたと言える。もともとフェリペ2世の遠縁にあたるメディナ・シドニア公爵は代々、アンダルシア沿岸の警備をも含めて新大陸を往復する艦隊編成の管理にあたってきた家柄である。今回のイギリス遠征についても意見をもとめられ、事あるごとに貴重な助言をフェリペ2世に提出してきていた。壮大な編成案を立てたのはサンタ・クルス侯であるが、それに従って実際に膨大な数の艦船の徴発収集を行い、シシリー、ナポリからカディスへ回航されてくる艦船の管理に裏で奔走していたのは、メディナ・シドニア公に他ならなかったのである。それに加えてスペインの穀物倉であるアンダルシアでの食料調達から兵員の徴募などの重要な仕事にも忙殺されていた。その見事な管理能力とスペイン貴族随一の資力を駆使してフェリペ2世のスペイン艦隊を陰から支えている人物であつた。メディナ・シドニア公の私欲を捨てた奮迅の努力がなければスペイン艦隊は形をなさなかつたであろうと言われる。艦隊編成のすべてを承知している実績を高く評価し、しかも他者を押さえて頭に立とうしない穏やかな性格を信頼したフェリペ2世は、サンタ・クルス侯の後任に躊躇なくメディナ・シドニア公を選んだのだつた⁵⁾。

リスボンへ移ってからのメディナ・シドニア公の働きはまさに寝食を忘れての奮闘ぶりであったが、その結果、5月14日に総旗艦「サン・マルティン」の船上から艦隊の全貌がフェリペ2世へ報告されている。それによると小型の運搬船も含めて130艘、総トン数にして57,868トンである。サンタ・クルス侯の案では510艘、110,750トンであった事を思えばトン数にして半分の減少である。戦闘艦であるガレオン船の数にそれほどの変化はないのだが、上陸用舟艇とでも言うべき小型船300艘余りが作戦の変更で必要なくなったのでばっさり削られて数字が大幅に減少している。大砲は1,497門、砲弾123,790、戦闘員19,000、水夫8,050、総員で30,656とかなり削減されているのがわかる。それに応じてあらゆる装備、備品も縮小されて身軽になったが、それでも艦船130艘、人員3万を擁する艦隊はヨーロッパ史上始まって以来の大編隊であることに変わりはない。トルコの威嚇に対する防衛を温存し、新大陸船団の護衛も考慮すれば、これがメディナ・シドニア公に集められる最大の装備であったろうし、スペインの国力で達成できる軍備の限界でもあった⁶⁾。

2.

イギリス遠征のハードウェアとも言うべき艦隊の陣容編成は、概略このような経過をたどってきた。あとは130艘の艦船が烏合の衆となり果てぬようにこれを効率よく動かさねばならない。ではソフトウェアにあたる戦略面はどうであったのか、むしろこちらが問題である。イングランドからプロテスタントを駆逐してカトリックを復活させる作戦計画を委ねるべき人物はメディナ・シドニア公をおいてほかにないと確信するフェリペ2世が、4月1日の書簡で概略次の4点を下達している⁷⁾。

(1) まっすぐ海峡をのぼってマーゲイト岬へ航進するべし。そこでわが甥のパルマ公と合流して渡峡を支援するように。…貴殿とパルマ公の双方が互いの動きを知らせ会う必要がある。そのため貴殿が現地へ到達する以前にグラベリーヌ、ダンケルク、ニューポートへ伝令を派遣して出来るだけパルマ公と連絡を取り続けるのが肝要である。

(2) 敵は大砲の優位、その他の火器の有利を利用して遠距離から攻撃を仕掛けるだろう。当方の戦法は接近して敵船に接舷することにある。敵は低い位置を砲撃して船を沈めようとするから十分に注意しなければならない。

(3) 戦闘を避けて艦隊の戦力を温存したままパルマ公の渡峡が実行されればそれに優ることはない。艦隊が戦闘を行う必要がなければ、貴殿はパルマ公に兵士 6,000 を渡して貰いたい。敵との戦闘があった場合、渡す兵員数は戦力の消耗度合いによる。

(4) パルマ公の軍勢が岸に展開したら艦隊をテムズ河口に配備してこれを支援し、フランドルからの敵援軍を阻止してわが軍を双方から強化する。…貴殿ひとりの裁量で上陸したり海岸を確保したりしてはならない。パルマ公と一致協力して行動すべきである。

スペイン艦隊の襲来に備えてイギリスは、戦艦の船首楼と船尾楼を取り払って徹頭徹尾船体を低くして風の抵抗を減らし、船幅と全長の比率をあげて流線型に近づけて水切りを良くした結果、風上へ間切る時や旋回する場合の操船性を飛躍的に向上させていた。鈍重な船に兵員と物資を満載した動きの遅いスペイン艦隊がこれに翻弄されることになるので

ある。大砲も4ポンド、6ポンド弾を撃ち出す18口径のカルバリン砲、半カルバリン砲を主流として全体で497門を搭載していた。スペインもカルバリン砲を搭載してはいたが3分の1ほどの172門であり、主砲は25口径カノン砲にあったので射程距離が若干短い。そのためスペインの砲弾は敵船の60メートルほど手前でむなしく海に落ちて水しぶきをあげる。敵はこちらの射程距離外から悠々と砲撃してきた。とは言えまともな照準器もない時代に砲術士が勘に頼って狙いを定めるのだからほとんどがメクラ撃ちである。波浪で互いに揺動している艦船から艦船へ砲弾を命中させるのがいかに困難であるか。有効射程距離を平均300メートル以内としても、絶えず浮動している砲口から飛来する砲弾はほとんど命中しなかった。まれに当たったとしても100メートル以内の距離に入らないと舷側を貫通するだけの威力がない。そのうえ一度発射すると再装填に時間がかかる。まず2トンの大砲を船内へ引き込み、砲身内をスポンジで綺麗に掃除して火薬の残滓をはき出さねばならない。つぎに適量の火薬をシャベルですくって砲身に入れ、突き棒で突き固める。あるいは紙製の薬包を装填する方法もすでに考案されていた。砲手は再度砲身内を掃除してこぼれた火薬を取り去る。最後に砲弾を落とし込んで薬などで詰め物をしてから大砲をもとの位置へ押し出す。砲術長が照準を定め、点火線で火門に点火して発射。これだけの作業に熟練した砲兵でも15分を要したのである。ましてやスペイン艦隊のようにわか仕立ての砲兵では一時間かかる場合もあったと言う。7人の砲兵がかかりきりになって一時間に3発平均、訓練の行き届いていたイギリス軍はスペインの3倍の速度で発射したと記録されている。それにしても大砲の命中率も破壊力もまだあてにはできない時代であり、砲撃だけで船を沈めることは不可能だった。したがって海戦とは言えその実は、陸上戦を船上へ移しただけのことで、依然として艦船同士を接舷させて戦闘員

が乗り移り、甲板で白兵戦を行うのが通常の戦法であった⁸⁾。したがってスペイン艦隊がその威力を発揮するには接近戦に持ち込まなければならぬのである。そのためにスペイン艦隊は2万近くの兵員を満載している。しかしイギリスにしてみれば、敵艦隊がどれほどの偉容であろうと兵員を本土へ上陸させるのを阻止さえすればよかった。スペイン艦隊の戦闘員がたとえ2万であれ5万であれイギリスの土を踏ませなければ無用の数である。なにも危険を犯してまでスペイン艦隊を殲滅させる必要はないのであって、追い払ってしまえば事は足りる。つまり敵艦船の入港を阻止することがイギリス艦隊の至上命令であった。後にドレイクが国務長官ウォルシinghamへ「敵艦船を風下へ追いやったのでパルマ公とメディナ・シドニア公はここ数日、手を握ることはできないだろう」とリベンジ号の甲板から記しているとおりである⁹⁾。

最も危険なプリマス港とワイト島を過ぎれば、その先にスペイン艦隊が入れるだけの港はない。ワイト島沖のポートランドを通過したスペイン艦隊は、フェリペ2世の指令するテムズ河口はもとよりマーゲイト岬へも到達することができなかった。やむえずカレー沖に停泊したスペイン艦隊にイギリスは、火船攻撃を仕掛けて見事にこれを四散させた後、北海の荒海へとまさに追い払ったのである。それがイギリス側の戦術であり、当初からスペイン艦隊と無益な白兵戦を演じる意図のなかったイギリス艦隊は、戦闘員をほとんど乗せずに身軽であった。その戦法が功を奏してイギリス艦隊は、一度たりとも敵艦船の接舷を許さなかった。逆に言えばスペイン艦隊はイギリス領土に上陸することはおろか、敵艦船に指一本かけることが出来なかったのである。戦列艦の優劣、大砲の相違、砲弾、火薬の質などが複雑に絡む問題なのでその詳細は本稿の埒外にあるが、少なくとも指令(2)に読めるようにフェリペ2世はイギリスの戦法を承知であった。しかるにその対抗策をとることをしなかつ

た。その結果、テムズ河口に艦隊を配備するべしと言う指令（4）は水泡に帰したのである。その意味でもイギリス本土上陸作戦は完全な失敗であったと言えるだろう。

3.

スペイン艦隊の任務は海峡を掃討して安全を図り、マーゲイト岬に停泊してパルマ公の軍勢が渡峡できるようにすることにあった。遠征作戦の主眼は（1）の指令、「まっすぐ海峡をのぼってマーゲイト岬へ航進するべし。そこでわが甥のパルマ公と合流して渡峡を支援するよう」に尽きると言える。パルマ公とはアレハンドロ・ファルネシオ。カルロス5世の私生児マルガリータとオクタビオ・ファルネシオとの嫡子であるからフェリペ2世には甥にあたる。1545年生まれの43歳。1578年10月にドン・ファン・デ・アウストゥリア亡きあとフランドル総督に任命されて現在に至っている。プロテスタント反乱の拠点であったゲント、ブルージュ、アントワープなどの重要都市をつぎつぎと陥落させて優秀な武将の資質を余すところなく発揮し、フェリペ2世からは絶大の信頼を得ている人物である。しかしネーデルラントの平和統治を一手に任されているパルマ公は、どちらかと言えばイギリス遠征に乗り気ではなかった。スペインの意に添わぬネーデルラントを武力で統治する難しさに塗炭の苦しみを舐めている。ましてやイギリスのごとき強固なプロテスタント国を征服統治するのはまず不可能であって、やっかいな問題を抱え込むだけだと考える。もちろんプロテスタント反乱軍に対するイギリスの支援を遮断しなければならないが、それは和平交渉で解決すべきであらう。勇敢な武将ではあるが無益な流血はさけないのが本音であった。イギリスまで出かけて無闇に戦争を行うべきではない。その前にネーデルラントの内乱を掃討しなければならないと考えていた。フェリペ2世

も武力行使と平行して和平交渉をパルマ公に指示していたのは確かである。実際にフランドルのイギリス領オステンデで会合がもたれていたのである。しかしその指令には驚くべき言葉が見られる。

「相手の言うことをすべて信じるふりをしておくように。…貴殿だけに言うのだが、イギリス側がどのような条件を提示してこようと、これらの交渉がなんらの結果も結ばぬようするのが余の意向である。唯一の目的は相手を欺いて、防御など必要ないと思わせて防衛体制への熱意を削ぐことである。」「のりくらりと交渉を続けて、こちらの侵略準備の時間稼ぎをしてもらいたい¹⁰⁾。」

これがフェリペ2世の和平交渉の真意である。パルマ公は6ヶ月、文字通りののりくらりと交渉を続けた。もちろんイギリスは相手国の煮え切らない引き延ばし作戦に気がつき、スペイン艦隊がコルーニャを出撃した時点でエリザベスから引き上げ命令が出されたのだった。それより以前、「和平交渉など私には奇妙に思えます」と言っているハワード海軍卿は、すでに6月19日の書簡で「ごまかしの和平交渉についても、スペイン王が時間稼ぎをするに決まっています…」とウォルシンガムへ記している。東部艦隊司令官のシーモアからも「和平交渉をやたらと口にするのはスペイン王が作戦に移る前にすべてをいかに完璧に整え、水先人を確保するかをしめています」とウォルシンガムへ注意を促していた。一方、パルマ公はこう述べている。

「イギリスとの和平交渉は女王が使節団を引き上げさせておわりました。彼らはカレーから出港しました。…和平交渉継続の私の努力は無駄でした¹¹⁾。」

帰国の途についた使節団は8月18日にドーバーへ上陸している。無駄に終わる交渉であるのは初めから分かっていた。国王の命令を受けて無意味な交渉に時間を割かねばならなかったパルマ公の悔しさがにじみ出ている。決断は遅いがひとたび決めると断固としてこれを曲げない性格であったと言われるフェリペ2世は、30年の遅疑逡巡の末に下した武力行使の決定に変更を加える気はなかったのである。

4.

スペインからイギリス海峡を抜けて延々と何万もの上陸部隊を運ぶのは危険をとまなう難事業である。それよりも、ドーバー海峡を隔ててすぐ近くに駐留するパルマ公の軍隊を渡海させればはるかに安全で楽である。ダンケルクからテムズ河口に近いマーゲイト岬まで80キロ足らず。パルマ公が軍勢を整え、渡海用の船を調達してスペイン艦隊の到着を待つ。リスボンを出た艦隊はイギリス海峡をのぼってマーゲイト岬へ達し、巨大な艦隊の偉容をもってあたりを睥睨すれば敵は恐れおののいて姿を見せないだろう。もし抵抗すればこれを撃破し、海峡を掃討して水路の安全を確保する。それに呼応してパルマ公の軍勢17,000がダンケルクから大挙して出撃して合流する。そしてテムズ河畔に上陸して一気にロンドンへ攻め上り、エリザベスの身柄を拘束してイギリスをカトリックの国に変えるのである。スペイン艦隊とパルマ公の軍勢がひとたび合流を果たせばあとは簡単である。劣勢で臆病なイギリスはわが方の膨大な陣容の艦隊と雲霞のごとき大軍に震え上がり、抵抗もせず尻尾を巻いて逃げ去るはずである。ロンドンへ入れば圧政に苦しんでいるカトリック教徒が一斉に決起して合流するであろうから、エリザベスの政権はひとたまりもなく倒れるに違いない。マドリッドのエスコリアル宮で開かれ

る作戦会議はそのように決定し、そのように指令が出されたのである。この能天気な作戦の致命的な欠陥は、イギリスからの情報が完全に欠落していることである。カトリック教徒がスペイン進撃に呼応して決起するという楽観的な見方は歴史的に完全な過ちであった。またハワードやドレイクのイギリス艦隊をまるで「アヒル艦隊」のごとき脆弱な勢力と見なし、ひ弱で臆病なイギリス人は恐怖に怯えて抵抗もできず、スペイン艦隊をそのまま通過させるだろうと考えていたのは、信じ難いことだが事実である。そこにスペイン帝国の驕りがあったと言えるだろう。たかが小さな島国と侮った節が見られるが、世界有数の情報網を持つイギリスは、スペイン艦隊の派遣を察知してすでにその防衛体制に入っていた。ドレイクとハワードの艦隊がすでにプリマスへ集結し、テムズ河口とドーバー海峡にも警備の艦隊が怠りなく配備されている。スペイン軍の上陸地点まで想定して防備を固めているのである。スペイン艦隊がマーゲイト岬へ到着したからと言って、それでドーバー海峡の安全が確保されるはずがない。ダンケルクからマーゲイト岬にかけての海域はがら空きの無防備状態である。それを思えばまるで妄想としか言いようのない欠陥だらけの作戦であった。

メディナ・シドニア公にしてみれば艦隊が搭載している 19,000 名の戦闘員から 6,000 をパルマ公へ渡すフェリペ 2 世の指令に不満であった。この作戦はもともとパルマ公の都合から生じたものである。ネーデルラントの警備をがら空きに放置するわけにはいけないので、イギリスへ派遣できる軍勢の数はパルマ公にしても限度がある。しかも寄せ集めの新兵が多いので是非とも信頼できるスペイン精鋭部隊の補充が欲しい。それならばメディナ・シドニア公が運んでいる 2 万近い兵士から 6,000 を裂いてパルマ公へ渡すのがよろしかろう。そのような作戦にもとずいてフェリペ 2 世から矢継ぎ早の指令が来る。

「貴殿の運ぶ兵員は予想より多いのだからそれが可能であろう。渡す予定の 6,000 名をもっと増やすのがよろしい。10,000 から 12,000 にしてはどうか。全体の数からすれば痛手とはなるまい。」「21 日の書簡に記したとおり 12,000 が無理ならせめて 10,000 名を渡せるように努力して貰いたい。出来るなら是非そうしてもらいたい。貴殿も遠征の成功を望んでいるに相違あるまいから、出来るならさらなる数を渡してくれると信じている¹²⁾。」

敵の出方次第ではあろうが、マーゲイト岬へ到達してパルマ公と合流するまではいたずらに敵を求めて戦闘に入ったり、途中でプリマスやワイト島へ攻撃を仕掛けてはならない。針路を妨害するものを排除する以外に何もしてはならない。パルマ公と合流するまではまっすぐ航進して、くれぐれも戦力を温存するようにとフェリペ 2 世が別の書簡で幾度も念を押しているのはこの 6,000 名の件が腹にあったからである。ワイト島を占拠すれば警備の兵員を裂いて駐留させねばならない。戦闘を行えば死傷者もでる。そうなればおのずとパルマ公へ渡す補充兵の数が減るのは明らかである。フェリペ 2 世はそれを恐れていた。イギリスへ上陸してこれを制圧統治するには 5 万の軍勢でも足りないと言う者もある。たとえパルマ公に 6,000 を補充しても 2 万程度の軍勢にしかならないのである。補充兵は少しでも多い方が安心である。事実、パルマ公は「6,000 名を補充できても敵が充分な備えを整えているのを考えれば、我が軍はまだ弱体であります」とフェリペ 2 世に訴えている¹³⁾。これを受けた国王からメディナ・シドニア公の方へ、せめて 1 万を渡せるように努力して貰いたいと無理な要請がなされているのである。しかしメディナ・シドニア公は賢明にも確約をさけ、フェリペ 2 世の認識どおりすべては

敵の出方次第であると予防線を張り、場合によっては 6,000 名を渡せないこともある、むしろその可能性の方が大きいと匂わせる。

立場上から国王陛下の命令を「否」と一蹴できないのが苦しいところであるが、まことにもって尤もな返事である。史上最大の艦隊をあずかる総司令官に戦闘をするなと命じてくるフェリペ2世と、現実には砲弾の飛び交うイギリス海峡に 130 艘の艦隊を浮かべて 3 万の人員を動かさねばならないメディナ・シドニア公とでは認識が違う。現場は殺気だっていた。イギリス艦隊が戦闘員を搭載していないことをまだ知らなかった時点では、兵員数において少しでも優位に立ちたいのが道理である。2 万近い軍勢から 1 万を裂いて渡せと言うことは、勢力温存のために敵の前から尻尾を巻いて逃げろと命じるに等しい。運んでいる戦闘員はあくまでイギリス艦隊と戦うための要員である。イギリスへ上陸するのはパルマ公の軍勢であるべきだ。それを承知で譲渡を命じてくるのは容易ならざる指令であろう。臆病でも無能でもないメディナ・シドニア公はそれには従えなかった。

5.

パルマ公の渡海の安全を図り、予定の補充兵を渡さなければならないとフェリペ2世は繰り返し言う。しかし肝心の問題が未解決のままに残されている。まずもってその 6,000 をどこでパルマ公へ渡すのか？ 艦隊の到達地点がマーゲイト岬であるならそこで渡すことになるだろう。ならばパルマ公の 17,000 の軍勢はまずマーゲイト岬まで乗り出してこなければならない。ダンケルクあるいはニューポートから出撃するにせよ、どうやってマーゲイト岬まで来るのか。パルマ公は 300 艘の上陸用小船を準備していると言う。しかしスペイン艦隊がマーゲイト岬に停泊しているなら途中の海域は無防備である。今ひとつ大きな問題は、合流地点

がマーゲイト岬からカレー沖に変更されていることである。マーゲイト岬へ入るには東または南東の風が吹かない限り難しい。季節としては逆風であるから、奇跡でも起こらない限りマーゲイト岬



からテムズ河口へ入れる可能性はなきに等しい。これはパイロット達の一致した意見である。であればパルマ公が出撃してくるはずのダンケルク付近で合流するのがもっとも合理的で安全であろう。しかし喫水の深いガレオン船はダンケルク沿岸へは近づけない。その先は浅瀬と岩礁が牙をむいて危なくて進めないのである。130 艘の艦隊が停船するにはダンケルクよりも7リーグ (x 4.8 km) 西方にあって、マーゲイト岬に最短距離のカレー沖を限界と定め、メディナ・シドニア公と参謀達はそのように決断を下したのだった。

明らかにフェリペ2世の命令に違反しているがやむえない。フェリペ2世は遠くマドリッドの執務室である。艦隊は刻々と変化する厳しい現状に対応して臨機応変に指令を下していかなければならない。こうしてフランス領のカレー沖に達した艦隊に投錨の命令が下ったのは1588年8月6日の午後5時であった。2キロばかりの風上にはハワード提督隷下のイギリス艦隊が錨をおろして対峙する。ドーバー海峡を遊弋していたウインターの艦隊とテムズ河口の警戒にあたっていたシーモアの艦隊も刻々と集結して数を増やしている。ドーバー海峡でもっとも潮流の早い位置に停泊せざるを得なかったスペイン艦隊は、2個の錨を張っても浅瀬の方へ流されそうになる。きわめて危うい綱渡りの状況のもとでパ

ルマ公の出撃を待つことになったのだが、ここでもしパルマ公の軍勢が出撃してこなければどうなるか？ メディナ・シドニア公がもっとも危惧したのはこのことである。そしてそれが現実のものとなった。パルマ公は出てこなかったのである。避難港をもたない艦隊が敵に包囲されたまま長時間、あてもなく待機することはできない。艦隊到着の通報とともに時を移さずパルマ公が出撃してくれるように刻々と伝令を送ってある。だからパルマ公は手筈を整えてただちに合流してくるはずである。少なくともメディナ・シドニア公はそう信じていた。しかるにパルマ公は動こうとしなかったのである。

この時のパルマ公の行動は謎である。どちらかと言えば些末な事柄にうるさいほど詳細な指示を送ってくるフェリペ2世が、肝心要の合流作戦に関しては、パルマ公と緊密に連絡を保って現場で「よきに計らえ」と言うばかりで具体的な指令はなにもなかった。もはや机上の作戦の限界を超えた問題であって現実的な指示が出来なかったという方が正しいだろう。しかし司令官達の間では早くから予想されていた問題であって、フェリペ2世はこれを曖昧に言葉を濁して先送りをしてきた。それが今、現実となってメディナ・シドニア公の両肩にずしりとのかかかってきたのである。戦闘を交えながら洋上を移動しているメディナ・シドニア公とフランドル総督パルマ公とが連絡を取り合うには伝令船による書簡しかない。頻繁に連絡を取り合うようにとフェリペ2世からの指示があり、パルマ公も書簡で「緊密に連絡をとるようにしている」と約束している。メディナ・シドニア公にしてみれば言われるまでもないことであるが、しかしパルマ公の言う「緊密に連絡をとる」とは実際にはどのようなものであったのかは次に見るとおりである。

まず1588年5月11日にフランシスコ・モレシン隊長がパルマ公からの3月22日付け初書簡をリスボンに停泊中の艦隊へ届けてきた。パル

マ公の準備状況を報告し、艦隊の現状を視察確認するためであったが、ゲントからリスボンまで40日を要している。そのときの報告からメディナ・シドニア公は、パルマ公の軍勢が17,000を越すものではなく、「權も帆もない小船」が300艘程度準備されているのだと知ったのである。嵐で四散した艦隊をコルーニャで再編成に努めている6月10日にメディナ・シドニア公は、モレシン隊長に書簡を持たせてパルマ公へ送り返している。

「イギリス沿岸に到着すればわが方の位置を知らせますので、閣下の船団を出発させて頂きたい。これほどの大艦隊を保護できる沿岸があるよう望む次第ですが、背後に安全な港を確保しないといけません。しかしこれは不可能ですから、モレシン隊長が到着次第（天候によりますが）、最善の機会を利用し、彼が連れている使者に合流位置ならびに会見場所の指定を持たせて送り返していただきたいのです。…最も重要なのは艦隊と閣下の船団とが合流する地点であります。これさえ定まれば陛下の計画どおりに事態は運ぶだろうと考えます¹³⁾。」

艦隊を動かしているメディナ・シドニア公が、130艘の船足をとどめて合流できる地点の確定を急いでるのが分かる。総司令官にしてみれば切実な問題である。だがパルマ公はどういうわけかこれには返信をせず、フェリペ2世へその書簡の写しを添えて訴える。

「私が小船で乗り出して合流可能だと思いこんでおられます。出来ることではありません。また陛下の利益のためにも申しますが、メディナ・シドニア公はそれに期待をかけておられるのが私には不安であると申し上げます。…こちらからむこうに合流する件ですが、外洋ではなく

河川仕様に作られた小さな低い平底の船では、最短距離をはずれることができないのだとメディナ・シドニア公に知って貰いたい。針路が確保され敵から安全に守られているとしても、この船で敵地上陸を実現させるのはまさに神の壮大な恵があつてのことです。定めの針路をはずれて犠牲者を出す危険をおかし、メディナ・シドニア公と合流するためにそのようなことを企て、もし敵艦隊と遭遇でもしようものなら、敵は簡単にこちらを壊滅させてしまうでしょう。これは明らかであり、いかなる努力をもってしても守りきれものではありません。このような小船では大きな船とは戦えず、ましてやわずかな嵐にも耐えられない船だから外洋を乗り切ることが出来ないと充分にご承知であるが故に陛下は、スペイン艦隊にわれわれの渡海の安全を確保するよう命じられたのであります。…渡海が安全無事であるなら、陛下の指示にいささかの相違もなく我が軍を成功裏に渡らせる努力を惜しまないことを再度ここに確認申し上げる次第であります¹⁴⁾。」

定めの針路をはずれるとはマーゲイト岬の予定がカレー沖へ変更されたことを指している。暗にこれを非難しているのである。しかも河川仕様の小船ではたとえ針路の安全が確保されたとしても、合流して敵地に上陸するには神の壮大な恵みが必要だという。だが海峡の安全確保がされたなら成功裏に渡らせる努力は惜しまないとも言う。果たしてパルマ公には出撃する気があるのかないのか、はなはだ曖昧である。艦隊がコルーニャを出港していよいよイギリス海峡へさしかかるとき、メディナ・シドニア公はロドリゴ・テリョを7月25日にダンケルクへ派遣した。彼は8月2日にブルージュにパルマ公を訪ね、3日付返信をもって8月7日にメディナ・シドニア公のもとへ帰還しているが、このときすでに艦隊はカレーに停泊している。返信のないことに危惧を抱くメデ

ィナ・シドニア公は、総旗艦「サン・マルティン」の船上から8月1日付けでファン・ヒルを、4日にはワイト島沖からペドロ・レオンを相次いでパルマ公へ送る。

「すぐにも船二艘に火薬と同封メモに記載サイズの砲弾を積み込んで緊急にこちらへ送っていただきたい。いまひとつお願いするのは、もし風がよければ間もなくフランドル沿岸に到着すると思うのですぐにも合流の準備をして頂きたいことであります。これ以上遅れるかどうか分からないが、とにかく火薬と砲弾が必要なので出来るだけ大量に即時に送って頂きたい¹⁵⁾。」

ワイト島沖の激戦で消耗した4、6、10ポンド砲弾の補充を依頼するついでのようにして合流の準備を促しているのがわかる。実は砲弾よりも合流地点の確定の方がはるかに緊急を要するのである。2通とも無事にパルマ公へ届いているのだがやはり返信がない。そして8月5日に航海士ドミンゴ・オチョアを送り、翌6日には秘書官アルセオを相次いで派遣し、カレー沖に停泊している艦隊位置を知らせて出撃を要請するのである。それでもパルマ公からは梨の礫。もう少し身分のある人物を送るべしと考えたのか、8月7日には総監察官ホルヘ・マンリケをパルマ公のもとへ派遣して再度出撃を要請している。

「総監察官ドン・ホルヘ・マンリケを閣下のもとへ送って艦隊の状況並びに港の緊急必要性を報告させます。艦隊が巨大規模であるので港がないと壊滅するのは間違いありません。出来るだけ早急にこの方針をとっていただきたい¹⁶⁾。」

メディナ・シドニア公の悲鳴が聞こえてきそうな文面である。岩を咬む波が飛沫をあげているので岩礁のある位置はそれと分かるが、それ以外の海面は穏やかに見えて波の下に不気味な浅瀬を隠し持っている。風上には 230 艘に数を増やしたイギリス艦隊が虎視眈々と隙を窺い、オランダの艦船も 20 艘ばかりがそれに合流してきている。潮流の激しい危険な状況のカレー沖で来るあてのないパルマ公を待ち続けるのは自殺行為に等しい。速やかに出撃して貰いたいと幾度も促すのだが、ついにパルマ公の合流はなく返事すら届かなかったのである。

6.

8 月 8 日のイギリス艦隊の総攻撃は苛烈をきわめ、ついに持ちこたえられなくなったスペイン艦隊はフランドル沖での座礁を避けるべく北海へ抜けざるを得なくなった。ダンケルクから目と鼻の先、グラベリーヌ沖で熾烈な海戦が演じられているときにパルマ公は何をしていたのか？ フェリペ 2 世には「出来るだけ緊密に連絡をとるようにしています」とうそぶくパルマ公は、メディナ・シドニア公の出撃要請を意図的とも思える冷淡さで無視してきた。なぜなら出撃できないからである。しかもその理由をすぐ間近で奮闘しているメディナ・シドニア公へではなく、はるか遠く、マドリッドの執務室で痛風に苦しんでいるフェリペ 2 世へせせと書き送って弁明に努めているのは不可解である。次に見るとおり、その内容はすでに 6 月 22 日に送った書簡と重複している。

「本月 2 日、ドン・ロドリゴがメディナ・シドニア公からの 7 月 25 日づけ書簡を届けてきました。5 日には本月 1 日づけのメディナ・シドニア公からの書簡をファン・ヒルが届けてきました。翌日 6 日の夜、ペドロ・レオンから 4 日づけ書簡を拝領しました。本日、航海士（オチョ

ア) が6日付け書簡を写しと共に届けてきました。…こちらが援助できる地点へメディナ・シドニア公がうまく到着すれば、ただちに渡海が安全に実行されると確信ください。…メディナ・シドニア公の言葉から判断するに、われわれが小船であちらに合流することを望んでおられるが、これは実行不可能であることは明白であります。当方の船はそのほとんどが河舟であり、荒海には向きません。穏やかな天候に兵卒を運ぶことはできても戦闘には適していません。…しかしながら私は全力を尽くしてメディナ・シドニア公と協力をするつもりであります。」

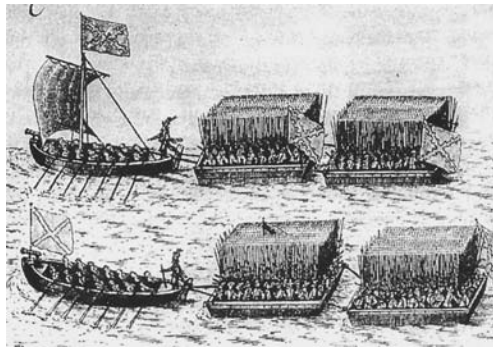
「しかしメディナ・シドニア公は依然としてわれわれが小船で乗り出して合流し、共に敵艦隊に攻撃を仕掛けることを望んでおられます。われらの小船で海に乗り出すのは不可能であり、兵員を失うだけであります。…全力をもって公に協力し、必需品の補給を提供するつもりであります。」

「ホルヘ・マンリケ（総監督官）がこの協力要請を伝えてきました。敵との戦闘に参戦すべきではありますが、当方の小さくて脆弱な船は戦闘にはまったく不向きで、外海や強風にすら耐えられないことをメディナ・シドニア公はご存じがない。そればかりか敵の船はわれわれが出撃するのを阻止するつもりであります。陛下に奉仕するためにはどうすべきかをホルヘを交えて慎重に討議の結果、天候が良好のときに、そして海峡に敵の姿が無いときに海峡作戦を決行すべきとなりました。…そして小船は陸地に横付けになって陸地と同じ高さにあるのを思い出していただきたい。天候が良好で海に敵艦隊がいなければ乗船出撃を阻むものは何もありません。これ以上の議論は無駄です。あとは神の意志を待つしかありません¹⁷⁾。」

ヨーロッパ史上始まって以来の大遠征作戦であるにもかかわらず「かくも長い間、パルマ公から何らの連絡もないのにはおどろきます」とメディナ・シドニア公がすでに7月30日にフェリペ2世へ不満を認^{したた}めている。水陸双方からの合流作戦の両指揮官がともに連絡をとりあっていない状況は異常であると言えるだろう。メディナ・シドニア公は、もしや書簡がパルマ公へ届いていないのではないかと危惧していた。しかしそれは杞憂であったことがわかる。すべての書簡は無事にパルマ公に届いていた。返事がこなかったのは通信事情によるのではなく返書を認める気がパルマ公になかったからである。

パルマ公の主張は一貫している。自分がダンケルクに収集している上陸用の船は河川仕様の運搬船であると言う。「小船は陸地に横付けになって陸地と同じ高さにあるのを思い出していただきたい」と臆面もなく述べている。これは岸边から馬や人に曳かれて運河や河川を上下する喫水の浅い平底の船のことである。船というよりも木製の大きな器とでも言うべきであろう。もちろん荒海の外洋へ乗り出すには適していない。むしろ不可能である。逆風だと動けないし敵の艦船に襲われれば為す術もなく全滅すると言うのも事実である。しかもイギリスとオランダの艦船がパルマ公の出撃を阻むべくフランドル海域の警備に目を光らせている。スペイン艦隊がやってきてまずこれらの敵艦船を掃討して海峡の安全を確保したうえでなければ出撃はできない。もともとそのような作戦になっているはずであるとパルマ公は言う。しかるにメディナ・シドニア公は、ダンケルクから出撃してカレー沖のスペイン艦隊へ合流するように求めてきている。それは約束が違うし出来ない相談である。パルマ公の軍勢をみすみす敵の餌食にしてしまう恐れがあるとも言う。それを承知で出撃はできない。さらにパルマ公が言うには、たとえ海峡が掃討

され安全が確保されても、逆風や海が荒れていればなおさらのこと、たとえ平穏な海でもこの小船では出撃が難しい。上陸用に集めている船が河川仕様の平底船であり、外海での戦闘には適さないこ



とはすでに報告してあるのでフェリペ2世も承知のはずである。脆弱な船では「穏やかな天候に兵員を運ぶことができても戦闘には適しません」と再度言う。そして「天候が良好で海に敵艦隊がいなければ出撃を阻むものは何もありません」と当たり前のことを言う。

実際にパルマ公の用意した平底船がどのようなものであったのか気になるところであるがその確証となるものが存在しない。参考図は17年後の1605年にスペイン軍がライン河を渡る姿を写したものである。おそらくこのような形のものであったのではないかと推定される。矛槍を立てて兵員を密集した箱船を後ろにつなぎ、小型の大砲を一門だけ備えた片舷7本オールが曳航している。事実、ダンケルクからマーゲイト岬まで8時間を想定して小船にぎっしりと詰め込まれ、身動きもままらなかったと兵士が不満を漏らしている。パルマ公自身も低い小さな船には「動き回れる余裕はなく」、早くから兵員を小船に乗せておくと身動きが出来ないので病人が出るから間際に乗船させると書いている。図に見るとおりまさに高さは陸地と同じ、櫂もなければ帆もない平底船に動き回れる余裕などまったくないのがわかる。このような箱形の船がダンケルクとニューポートに用意されていたのはほぼ間違いないのである。パルマ公のもとには小型の武装船が20艘あったと言うから、200名を

イワシの缶詰のようにぎっしりと詰め込んだ箱船を数珠繋ぎにして曳航する予定ではなかったかと思われる。この種の船なら短期間に 300 艘を調達できるのもうなずけるのである。しかしライン川だからこれでも渡れるだろうが潮流の激しい、嵐の吹きすさぶ、そしてイギリスとオランダの艦隊が獲物を狙って遊弋しているドーバー海峡をこの船団で渡れると誰が思うだろうか。だいたい「櫓も帆もない船」がどうやって洋上を進むのか？ 両岸から馬で曳かせる河船がドーバー海峡をどうやって渡するのか？ 海峡に敵の姿が無く、あまつさえ海面が鏡のように穏やかで順風であれば国王陛下の意図に従って速やかに出撃するにやぶさかでないと言ふパルマ公は言うのである。白々しく響くこの弁明をメディナ・シドニア公は最後まで知らなかった。フェリペ 2 世が知らせなかったのである。もしこれが耳に入っていたら啞然とするか激怒するかはともかく、来るあてのない軍勢を待って再三の出撃要請を繰り返しているメディナ・シドニア公の姿は気の毒ですらある。

7.

何を考えていたのかと問われれば、パルマ公は「フランドル軍の合流渡海作戦の完遂をひたすら考えていた」と答えるだろう。しかしどこでどのように合流するかという最重要のはずの問題などもはやけし飛んでしまっている。合流地点がどこであれ、パルマ公はいろいろと理由をつけて出撃してこなかったに違いない。平底船では出撃したくともできなかったはずである。まずパルマ公の弁明には当初から矛盾がある。イギリス海峡を掃討して安全を確保してくれれば出撃すると言いながらそのすぐ後で「たとえ艦隊が敵を掃討してくれても数日來の強風では出撃できない、風が収まっても戦闘には向かない脆弱な船は外洋の波にも風にも耐えられない、河川仕様の運搬船が出撃できるのは神の奇跡を待つし

かない」とも述べている。はたして何時なら出撃できるのか。櫓も帆もない、陸地と同じ高さの箱船が小船に曳かれ、穏やかな追い風を受けて鏡のごとき海面を雲霞のごとく整然と航行する姿は奇跡に近い。まるで洋上ピクニックのごとき理想的状況などまずありえないのである。

もともとイギリス遠征に乗り気でないパルマ公は、表面上は国王の指令に従って小船を集めた。しかしその船ではドーバーを渡れないのをパルマ公は百も承知であったと考えるしかない。スペイン艦隊が安全を確保してくれれば出撃できるようなことを言っているが、たとえ海峡が安全であっても出撃できなかったのが現実である。だからもし作戦どおりに艦隊が海峡を掃討してマーゲイト岬へ入れば、たちまちこれまでのごまかしが露見してパルマ公は進退窮まってしまうところであった。ところがメディナ・シドニア公が幸いフェリペ2世に無断で作戦を変更し、合流地点をカレー沖に移して出撃を要請してくる。パルマ公にとってこの変更はまさに渡りに船であったろう。海峡の安全を確保してマーゲイト岬へ停泊する作戦が遂行できないのなら、ダンケルクまで航進して敵艦隊を駆逐し、上陸船団を包囲警護して護送船団方式でイギリスへ渡してくれなければならない。ところが喫水の深いスペインの戦列艦はフランドル沿岸にまでは接近できない。オランダ艦隊は喫水の浅い艦隊を配備して出撃を阻止しようと警戒している。結局、パルマ公は沿岸からスペイン艦隊までの距離を移動できないのである。

和平交渉使節団のひとりデイル博士がレスター伯にこう書き送っている。「平底船は荷物運搬用であります。…どこかへ上陸のために密かに出港しても、平底船で運ばれる兵士達は攻撃を受けるであろうし、それだけでなくともすぐに分散してしまうに違いない¹⁸⁾」海戦にはずぶの素人が平底船の性能を看破している。ましてやパルマ公にその分からぬはずがない。外洋へ出られないのを承知で平底船をせっせと集めていたこ

とになるではないか。そしてカレー沖到着の報を受けて急遽、乗船を命令して一応すし詰めの出撃態勢はとってみせる。しかしオランダ艦隊が警戒しているので出られない。潮の流れも逆である。強風が吹いているのでこれが収まるまでは波が高くて出られないとフェリペ2世へ報告する。しかもオランダ艦隊が掃討され、風が収まって潮流が穏やかになれば必ず出撃して陛下の意志に添うようにいたしましょうと書くことを忘れない。フェリペ2世の指令に従って兵士を召集した、船の準備も遺漏なく手配した、出撃態勢も整えたのだが残念ながら敵艦隊が待ちかまえているし逆風でもあるのでカレー沖に出られない。そして「天候が良好で海に敵艦隊がいなければ乗船を阻むものは何もありません」と当然のことを言っているのだからである。

メディナ・シドニア公がカレー沖で艦隊潰滅の危機に瀕して懸命に活路を求めているとき、間近のダンケルクにあってパルマ公が何をしていたのかが報告書簡からこのように読める。少なくともパルマ公はフェリペ2世の命令を遺漏なく果たした。誰からも非難される余地のない完璧さである。パルマ公にしてみれば、国王陛下に仕え、命令どおりに指令を果たしている忠実な家臣であることを見せなければならない。艦隊の運命よりもフェリペ2世がどう思うかの方が重大であった。ダンケルクから半日の距離に一刻千秋の思いで返信を待っているメディナ・シドニア公を無視して、出撃できない弁明をはるか遠くのマドリッドにいるフェリペ2世にばかり頻繁に報告している不可思議な行動は、自らの潔白を弁明するためであったと考えれば領ける。繰り返しになるが、客観的な状況から判断してパルマ公には出撃する意志はなかったと言わざるを得ない。だがフェリペ2世の決定にはさからえなかったので忠実に協力している姿勢だけはとっていた。フェリペ2世の目を欺くための見せかけに過ぎなかったと考えざるを得ないのである。フェリペ2世は現場を

見ていないし、使節を派遣して確認することもなかった。渡峡できない河川仕様の小船であることをパルマ公はそれとなく匂わせてはいる。だが現実感のないフェリペ2世はそれを読み飛ばしている。パルマ公はそのすぐ後に必ず「最善の努力をして必ずや陛下の意に従うようにいたします」と書き加えてあたかも渡峡が可能であるような印象を与えることを忘れていない。フェリペ2世は実際にどのような船が集められているのか知るよしもなかったのである。

驚くべきことだが、スペイン史上初めての大作戦に際し、フェリペ2世、メディナ・シドニア公、パルマ公の3者が一同に会して意見を交換する場面が一度もなかった。3者が3様に作戦を描いて相互の意志の疎通ができていない構図が浮かび上がるのである。致命的な欠陥であると言えるだろう。因みにパルマ公の行動に対してフェリペ2世から咎めの言葉はなかった。確かにフェリペ2世にしてみれば咎めるだけの落ち度を見いだせなかったであろう。悪く勘ぐればパルマ公の思惑どおりであったと言える。しかしパルマ公の裏切りを糾弾する声は大きい。多少の犠牲があったとしても、それを覚悟でオランダ艦隊の攻撃をかいくぐってなぜ出撃してこなかったのか。それで失敗したとしてもひとたびとは裏切られた感覚は持たなかったであろう。帆船の時代に逆風などあたりまえのことで、なぜそれをついて出撃する努力をしなかったのかと指弾される。オランダ軍に捕縛されたピメンテル司令官が「パルマ公はなぜ小さいながらも艦船を繰り出してオランダ軍を攻撃する危険を犯そうとしなかったのか」と率直な疑問を述べ、少なくとも敵の間をすり抜けて艦隊へ合流できたはずだと怒りを露わにしている¹⁹⁾。海域が安全で風が順風ならば出撃できたのに残念でありますなどという能天気な弁明は、目と鼻のさきに130艘のスペイン艦隊が危機にさらされている緊急時に通用するものではなかったのである。

注

- 1) 和平交渉についてはエリザベスも乗り気であったのが女王からバルマ公への書簡に窺える。「当方の安全とわが国民の名誉と自由を確立できる妥当な和平提案がなされれば、意に染まない逆の行動を取るよりも、それを受け入れるにやぶさかでない」とご承知だと思う。キリスト教世界の安全と平和を確立するのが全能の神を喜ばせることだと考えるからである。われわれが常にそれを望んできたのを全能の神はご存じである。世界を逆の方向へ持って行こうとする者たちの流言に神の裁きが下るように。1586. 7. 8」 *The Great Enterprise, The History of the Spanish Armada*, Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987.
- 2) *LA ARMADA INVENCIBLE*, TOMO I, pp. 250-319, CESAREO FERNANDEZ DURO, MADRID, 1885.
- 3) 囚みに食料は10ヶ月分を備蓄するが、そのリストにはビスケット、チーズ、ベーコン、マグロ、塩漬け肉、豆類、米、ニンニク、ワイン酢、水、ぶどう酒などが記載されている。決定的に野菜類が不足しており壊血病その他の病気が蔓延したのもうなずける。
- 4) *Los Tercios de la Gran Armada (1587-1588)*, Manuel Gracia Rivas, editorial Naval.
- 5) *La Armada Invencible, 1587-1589: documentos procedentes Archivo Histórico Español*. Herrera Oria, Enrique, Valladolid, 1929.「フェリペ2世からメディナ・シドニア公へ」1588. 2. 14. エボリ大公ルイ・ゴメスの娘アナ・デ・シルバを妻にもつメディナ・シドニア公ほどの貴族であれば国王に反抗するのが通常の時代に、珍しく人と争うことを好まない穏健な人物だったと評される。それだけにまた艦隊の総司令官には適切でない人物であったとも言われる。カディス近辺の海岸で行われるマグロの漁業権を一手に収めて収益を得ていたのでスペイン随一の豊かな貴族であった。財政難のフェリペ2世にしてみればその財源をあてにできたのである。
- 6) *LA ARMADA INVENCIBLE*, pp. 60-84. 研究者によって数字に若干の差違がある。例えば何ポンド弾までを大砲とかぞえるかによって数字が大きく違ってくる。乗員の数も同様でばらつきが見られる。またコルーニャ出港時には151艘とする説もあり、また脱走兵や補充兵などによっても数に差違が生じている。
- 7) 「フェリペ2世からメディナ・シドニア公へ」1588. 4. 1. Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987. *ibid*.
- 8) 接舷して白兵戦を行う戦術はトラファルガー（1805年）の海戦にあっても主要な戦術であった。1588年にイギリスがいちはやく白兵戦から砲撃戦へ転換して、スペインが旧態依然

として白兵戦に固執したとの批判はあたらない。イギリスがスペイン艦隊を本土へ寄せつけないためにとった戦術だったのである。

- 9) 「ドレイクからウォルシinghamへ、7月29日」 *The Great Enterprise, The History of the Spanish Armada*, p. 105. Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987
- 10) *The Enterpraise of England, The Spanish Armada*, p. 109, Roger Whiting, Alan Sutton, 1988.
- 11) 「パルマ公から国王へ、8. 7」 *Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587-1603*. 373.
- 12) *Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587-1603*. 107, 109. Martin A. S. Hume, London, 1899.
- 13) 「メディナ・シドニア公からパルマ公へ、6. 10」 *Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587-1603*. 310.
- 14) 「パルマ公から国王へ、6. 22」 *ibid.*, 319
- 15) 「メディナ・シドニア公からパルマ公へ、8. 4」 *ibid.*, 364.
- 16) 「メディナ・シドニア公からパルマ公へ、8. 7」 *ibid.*, 372
- 17) 「パルマ公から国王へ」 *Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587-1603*. 373. 374. 380.
- 18) 「Valentine Dale からレスター伯へ、6. 17」 *ibid.*, 314
- 19) *The Spanish Armada*, Colin Martin and Geoffrey Paker, Mandolin, 1999.